ISSN 0913-0217　2026.9.1. 第1296号

発行人　北海道医師会長　松家　治道
編集人　情報広報部長　橋本　洋一

発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011)231-1432　FAX (011)221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 275円(税込)

季風

芥川賞作家の庄司薫氏（以下、敬称略）が2026年4月5日に老衰でお亡くなりになった。『赤頭巾ちゃん気をつけて』で芥川賞を受賞し、続く『さよなら快傑黒頭巾』『白鳥の歌なんか聞えない』『ぼくの大好きな青髭』いわゆる〝薫ちゃん4部作〟は大ベストセラーになった。独自性を示したかつての若い知性の代表者のひとりとも言える庄司薫の死に一つの時代の終焉を感じる。

庄司薫のエッセイ『ぼくが猫語を話せるわけ』に、本来、犬派であった庄司薫が演奏旅行等で多忙を極める友人の猫を預かる羽目に陥り、しょっ中、猫が元気でいるのか、様子を見に来ているうちに通うのが面倒になり、本来の飼い主である中村紘子さんまでが住み着くようになったと、お二人の結婚に至る経過がユーモラスなタッチで書かれている。

あるペットショップで、エゾシマリスを販売するという入れ込み記事を見て、反射的に申し込んでしまった。入荷時期を聞いたところ、解らないとのこと。いい加減な返答に半ば呆れかえりながらも、相手の次の言葉を待った。「中国産なので最低でも半年はかかりますよ」悠長な話だと思って聞いていたが、これから生まれるであろうエゾシマリスの未来の話だと後で知って、少し納得した。

「ペットショップ△△です。エゾシマリスが入荷しましたので、遅れることがないようにお願いします。」

「2匹でしたね」ペットショップの若い女性店員は、小さなダンボール箱に空気穴を作りながら、私に声をかけた。私はといえば、大きなカゴの中を動き回るエゾシマリスの俊敏さについて行けず、購入したことを早くも後悔し始めていた。

リスのカゴに背中を向けて、5、6人の人だかりの方に目を向けた。薄茶色をした3匹のネザーランドドワーフが身体を寄せ合っていた。そのあまりにも無垢で可愛い仕草に目が奪われ、この小動物の虜になってしまった。これが『モグ』との最初の出会いである。先ほどの女性の店員さんに、ネザーランドドワーフを購入したい旨を伝えると、「すみません。今、到着したばかりで、値段もまだついておりません。少し時間をいただけますか？」

庄司薫とはまったく経緯が異なるが、かつて猫派で、途中で犬派に転じ、最終的にウサギ派とリス派になった私は周囲の期待に反して、多大な時間を適切な衛生環境の維持と食事の準備に費やし続けてきた。

ネザーランドドワーフ『モグ』1匹、エゾシマリス2匹との4人暮らしが始まった。『モグ』の主食はウサギ用ごはんで青々とした草は食べ放題。人参とキャベツは大好物だ。エゾシマリスも人参、キャベツは共通で、ヒマワリの種が大好物だ。両者共に起きている時は、そのほとんどが食べることに費やされている。同居して、6年が経過し、『モグ』は十二分に太り、メタボの仲間入りを果たした。排泄の場所を教えていないのに、生後2カ月で既にトイレは自立し、頭の良さを見せてくれた。リスは時々逃亡し、私の部屋は、小さな動物園と化した。

30年前の夏休み、多摩大学主催の特別講演会があり、その時の講師が中村紘子さんであったので参加することにした。講演の内容は、音楽は国境を越えて、人と人をつなぐのに貢献してくれるかもしれないが、やはり言葉には及ばないといった趣旨の内容であった。講演後の懇親会で中村さんに直接尋ねてみた。「ご主人の庄司薫さんは、新しい作品を書かれませんか？」「そのうちに書くかもしれませんね。……これから福岡へ演奏旅行なんです。中座させていただきます」満面の笑みを浮かべながら、小柄で気品に満ちた貴婦人ともいうべき中村紘子さんは応えてくれた。

『モグ』とリス2匹と同居して、言葉の持つ重みをひしひしと感じる毎日だ。こういった生活からいつ【総退却】する日が訪れるのか居候3匹の食欲旺盛な姿を見て、ま、いっかと思った。

『ぼくがウサギ語とリス語を話せるわけ』
―薫くんは決して死なない―

情報広報部長　橋本（はしもと）　洋一（よういち）